

芭蕉俳諧の限界性

松尾靖秋

芭蕉の俳諧が、彼の古典的教養を基盤としてその上に成立するものであり、ことに初期から中期へかけての俳諧が、古典の知的遊戯から、その換骨奪胎への展開を示すものであるということは、芭蕉の俳諧について語る場合の常識としてこれまで認められているところである。わたくしはなにもそれに対してここで駁論を試みるつもりはなく、わたくし自身もこれを認めることにいささかも躊躇するものではないが、ただ、芭蕉のこのような古典追求の精神に対して、これを既存の事実として論じ、また彼の古典追求の精神こそ彼の本来の精神であって、あたかも生れながらにして古典の遵奉者であったかのような考えに基づいて、その現象を追求し、たれもこれを疑う者がなかった、というのがこれまで行われてきた芭蕉論のあり方であって、何故に彼がこのような態度をとらざるを得なかったかということ、つまり彼の古典追求の必然性というような問題については、あまり論じられてこなかったようである。そこでわたくしは上述のようなこれまでの考え方とは対蹠的な考究方法によって、芭蕉の俳諧における古典導入の態度について、つまりわたくしの論法に従うならば、彼の俳諧の限界性というような問題について実証的に考えようとするのがこの論の主旨をなすところである。

論述の便宜上、従来の説に対してやや重複の憾はあるけれども、まず彼が古典をいかに取り入れたか、ということについて概観し、後半において、これがいかに彼にとっては必然の運命であったかということに論及しようと思う。故にここでの論究の要点はむしろ後半にあることを、あらかじめおことわりしておきたい。なおまた、彼のこうした古典摂取は、もちろん散文の上にも現われているけれども、一々例証する必要もあるまいと考えられるので、ここではいちおう俳諧、なかんずく発句についてのみこれを対象として考えてゆきたいと思う。

1

芭蕉の俳諧が貞門に発し談林を経て蕉風の確立に至ったということは、いまさらこ

芭蕉俳諧の限界性

こに取り立てて述べるまでもないことのようにであるが、煩わしさをかえりみず、まずその跡をたどり、いかに彼の俳諧が晩年に至るまで貞門的な態度に支配されていたかを考察する必要がある。

芭蕉の俳人としての出発は、明暦三年、すなわち彼が十四歳のとき「戌と申の世の中よかれ酉の年」という句をよんだという伝説的なことについては取り上げないとしても、寛文二年十九歳のころ、伊賀上野城代藤堂新七郎良精の臣となり、長子主計助良忠号蟬吟に近侍したのを事実とするならば、良忠が和歌・俳諧を好み、季吟を師としていた関係上、芭蕉も少くともある程度季吟との交渉を持ち、俳諧の試み程度のことはなしていたであろうことが充分推察できる。尤も季吟との関係をさほど重視せず、寛文六年蟬吟歿後の数年間における、芭蕉の行動の不明時代の季吟との関係については、最近これを否定的に見る論者もあるが、わたくしはすべてこれを肯定する立場で論述を進めようとしているのであって、その理由は論述の間におのずから明らかになってゆくであろうが、芭蕉の俳諧における出発、ならびにその展開の拠点としての季吟の存在を、わたくしは無視し得ないのである。

寛文六年芭蕉が消息を絶ったとされる年の翌年は、季吟にとっては湖春編『続山之井』の刊行された意義ある年であった。同書巻末に記すところの「作者九百六十七人、国数四十八ヶ国、句数五千三十五句」の文字を見るならば、貞門の俳風が当時いかに全国的に盛行を極めていたかということを想像することができる。『俳諧渡奉公』（延宝四年・汲浅編）に記すところによれば、「貞徳は御傘をひろげてあめが下にただよふ諸人をまねかる。是にこぞりて此道を分つ人々の誹書みちみちたり」とあることからしても、その間の消息が推察されるであろう。しかも季吟は、こうして打ち立てられた貞徳の俳諧の世界をば、もっとも忠実に祖述するという態度に終始した人である。同書にとりあつかわれた俳書のうち、季吟の撰もしくは彼に関連性のあるものを取りあげてみても、たとえば、『山之井』（正保三年）『稻子集』（明暦二年）『両吟集』（万治三年）『新続犬筑波』（万治三年）『十会集』（寛文五年）『哥仙誹諧摘』（寛文六年）『赤紫』（寛文十一年）『諸国独吟集』（寛文十一年）『花千句』（宝延三年）等があり、その他にも、『歌仙発句』『師走月夜』『廿会集』『続連珠』『三物記』等があげられているが、またこれ以外にも、俳書としては『いなご集』『増山之井』『季吟誹諧集』『室咲百韻』『誹諧埋木』『歌仙発句』『御傘大全』『百番誹諧発句合』『六百番誹諧発句合』等が存することは、人の知るところであろう。註釈学者としてはもとよりのこと、俳諧の上では万治・寛文を中心とする時代が、彼にとってもっとも華やかな時代であったようである。延宝四年の『続連珠』にまで

芭蕉の句が入集していることからしても、そのころ季吟と芭蕉との関係がかなり密接なものであったことが想像されるし、芭蕉の行動不詳の時代の経緯をば充分に物語るものとすべきであろう。すなわち、芭蕉はあきらかに、季吟の精神をみずから体得することによって、彼の俳諧観をば形成していったのであった。

さて、わたくしはここで、季吟の俳諧観について述べておく必要がある。

2

よろづの道修行にいたるといふ事なれど、俳諧はわきて造次にも思ひ、顛沛にもいひ出ずはあるべからずと、ある人のたまひければ、せめてひと日にひとつひとつだにつらねて、ひとゝせをもをくり侍らば、もしくはかたばかりも思ひうるることなどかなからんとおもひ給へたれど、もとより物しらねばいひつゞけん詞のたねもなく何を何とすべきよるべもなし。まづさるあらし斗に、四の時にしかはりゆく空の詠め、木くさの色の目に見ゆるさま、をのづからうつり来る今のこゝろばせをも、筆のついでにしるしとどめて、のちの題目にし、次に此ころ世にきこゆる集、をよび花さきの翁、一囊子、二家の句帳の中より其のりとしてあらまほしき句躰をかきぬぎ、みづからの手本とせり。あへてうとき主人のためにするにはあらず、あなかしこ。

やや長文であるが、ここに引用した一文は季吟撰『山之井』（正保四年刊・翌慶安元年再刊）各部末尾に加えられた季吟の筆になるものである。いうまでもなく俳諧修業の日常における態度について説いたものであって、その主張の要点は「物を知る」ということと、その上に先人なかんずく「花さきの翁」以下の人々の句作に学べということである。「花さきの翁」とは、もちろん貞徳のことであってみれば、貞徳の俳風に対して季吟が全面的に肯定の態度をとっていたことは言及するまでもない。貞門における古典尊重の態度、すなわち古典的知識の要求は、俳諧にバラエティを附与するための要請ではあったが、宗鑑・守武等によってうちたてられた新しい文芸としての俳諧に対して、その形式上の固定化と一応の権威とを保持させるための試みであったにちがいない。そのためには季吟はまことに恵まれた才能の人であったというほかはないが、季吟でなくとも、当時の貞門の諸俳人が、その古典的知識を蓄積するために、古典、なかんずく中世の古典に対して、これを究明することにかに興味を持っていたかということは、季吟時代の貞門の諸俳人によってなされた多くの古典註釈事業に徴しても明らかなるところである。古典に対する啓蒙の業は、近世初頭の啓蒙思潮につながる時代の要求であったかもしれないが、貞門の俳人たちが、その俳諧をば沢

芭蕉俳諧の限界性

成へとみちびくための不可欠のものでもあった。季吟の場合についてみても、季吟は十九歳にして貞徳の門に入り、『山之井』の成立したのは二十三歳のときのことで、既に俳人としての名声の高かったことが推察されることからしても、彼の本来の面目が註釈のための註釈の業にあったというような最近の見解は、ここに改める必要があるのではあるまいか。

承応二年三月、すなわち貞徳の歿年、彼の三十歳のとき、自序自跋をもつ『大和物語抄』六巻を公刊してのち、彼は註釈家としての多くの業績をのこしたわけであり、註釈家としての名声もここから生じたわけではあるが、その発足の動機には上述のごとき俳人としての意識のあったことを推察することも難くはない。ややわずらわしいことではあるが、ここで季吟ならびに二、三貞門俳人の古典註釈の業について考察しておく必要がある。

季吟の書には前記『大和物語抄』のほか、『湖月抄』六十巻、『春曙抄』十二巻、『徒然草文段抄』八巻、『八代集抄』百八巻、『万葉拾穂抄』三十巻等のあることは従来知られているところであるが、その他にも、『群書一覽』（享保二年刊）によれば、『訂正源氏物語抄』一冊、『伊勢物語拾穂抄』二巻のあったことが知られるし、また同じく貞徳の学統をうけついでた俳人加藤盤斎には、『枕草子抄』十五巻、『伊勢物語抄』六巻、『新古今増抄』二十巻、『徒然草抄』十二巻、『方丈記抄』一卷等従来知られたもののほか、同じく『群書一覽』によれば、『伊勢物語初冠』五巻のあったことが知られる。また貞徳門野々口立園には、『十帖源氏』十巻、『おさな源氏』があることは周知のところであり、また絵をよくした彼に『源氏絵抄』三巻のあったことも前掲書によって知られる。その他松江重頼の『毛吹草』についてみても、それがいかに古典的知識によってみだされているものであるかということが知られ、いずれも貞門諸俳人の古典尊重の態度を示すものにほかならないのである。

3

貞門の徒におけるこのような古典尊重の態度はそのままに芭蕉によってうけつがれた。すなわち芭蕉がその当初において季吟との関係をもったということが、彼の場合第一に宿命的な意味をもつのであって、彼の将来への指向性がすでにここで決定せられたということ、すなわちその限界性的一端がここにも存するであろうとすることができる。

卑俗趣味に没し去った宗鑑の態度から脱出するために、貞徳はこれまでの中世歌学によって培われた教養を駆使し、それによって伝統文芸の保有する品位をば俳諧の上

に定着せしめようとしたのであるが、『俳諧御傘』（慶安四年刊）はその目的のためにつくりあげられたものにほかならなかった。しかし貞徳にはじまる貞門の徒のこのような態度は、俳諧の上に古典を援用しようとするものであり、あるいは古典をばしいて俳諧化しようとするための素材的な意義をもつものであって、それは未成熟な稚拙にして陳腐なものですらあった。しかも『御傘』を最初とする貞門のもろもろの作法書が、かえって俳諧の発展性を阻害し、遂にはその桎梏の内に窒息せしめられねばならなかったという運命を孕むものであったことは、皮肉といわざるを得ないであろう。しかも貞門において頻りに主張せられた俳言の使用が、実は徹底したものではなくて、むしろ連歌の伝統に還元するというような、矛盾した現象を招くに至ったのであった。貞徳は『御傘』の序において、

抑はじめは俳諧と連歌のわいだめなし。其中よりやさしき詞のみをつゞけて連歌といひ俳言を嫌はず作する句を俳諧といふなり。

といい、季吟は、『増山之井』（寛文三年刊）において、貞徳の言を引用して、

俳諧すなはち百韻ながら俳言にて賦する連歌なれば云々。

といって、貞徳の説くところを祖述しているけれども、『俳諧埋木』（延宝元年刊）においては、

俳諧の字はわざことゝよむなり。これによりて皆人偏に戯言と思へり。かならずしもしからざるなり。

といっているのを見れば、季吟の考えるところも、すでにやや連歌の道に遡行し、上述のごとく確固たるものでなかったことが知られるのである。畢竟するに、たとえば季吟の句、

年の内に踏みこむ春の日脚かな

が例の『古今集』の「年の内に春は来にけり」のモデルである。「来にけり」が「踏みこむ」とされたところに、俳諧性のあるべき姿を彼は意識したのであった。わたくしはここでしばらく芭蕉の古典導入の態度について考察を進めようと思う。

4

芭蕉の句は管見によればおよそ千二百句を算せられるが、それらのうちでやや文芸性を認められるもので、しかも従来、その発想の契機となった出典について考察を進められているものを試みに若干取りあげてみるならば次のようなものがある。

- 1、古今集に出典を擬せられているもの。

芭蕉俳諧の限界性

袖の花や昔しのばん料理の間（嵯峨日記）

五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

2, 後撰集に出典を擬せられているもの。

高水に里も旅寝や岩の上（芭蕉庵小文庫）

岩の上に旅寝をすればいと寒し苔の衣を我にかさなん

3, 新古今集に出典を擬せられているもの。

秋風や藪もはたけも不破の関（野ざらし紀行）

人住まぬ不破の関屋の板びさし荒れにし後はただ秋の風

礎打ちて我に聞かせよ坊が妻（野ざらし紀行）

み吉野の山の秋風さよふけて古里寒く衣うつなり

田一枚植て立去る柳かな（奥の細道）

道のべに清水流るる柳かげしばしとてこそ立ち止りつれ

4, 山家集・同拾遺に出典を擬せられているもの。

雲をりをり人を休むる月見哉（春の日）

なかなか時々雲のかゝるこそ月をもてなすかぎりなりけれ

何の木の花とも知らず匂ひかな（笈の小文）

何事のおはしますをばしらねどもかたじけなさになみだこぼるる

5, 千載集に出典を擬せられているもの。

うかれける人や初瀬の山桜（続山之井）

うかりける人やはつせの山おろしはげしかれとは祈らぬものを

すべてを掲出するまでもなく、またその煩に堪えないが、手近かに求められる例句をあげても上のごとくであり、これらはいずれも先学によって明らかにされた芭蕉翻案の態度を示すものであるが、和歌よりの翻案ばかりでなく、源氏・伊勢・謡曲等のもとよりのこと、『竹齋物語』や往来物の構想をかり、あるいはそこに発想のいとぐちを求めたもの、あるいはまた、莊子、杜甫、杜牧その他の作品が非常に多くとりいれられていることは、これも従來說かれているところである。従来その翻案について論及されている句数はまことに多いが、そうしたもののほかにも、たとえば

侘てすめ月侘齋が奈良茶歌（武蔵曲）

は、

侘てをれ七重のひぎを八重桜（山之井）

の句を必然的に連想させるものであるし、また、

馬ぼくぼく我を絵に見る夏野哉（泊船集）

は、同じく季吟の

一僕とぼくぼくありく花見哉

なる句との関連性を無視することができない、というふうに、今少しその考察を詳密に行うならば、現在知られているものの上に、更にかなり多くの同種のものを加えることができるのではあるまいかと考えられ、それらの全句数に対する比率もかなり高いものとなるのではないか、ということが推察されるのであるが、そうしたことは、われわれをして、芭蕉の俳諧があくまでも俳諧であったというその限界性をば意識せしめるものとなるであろう。

ここで更に『奥の細道』出発の際の句「行く春や」の句をとりあげてみたい。この句に対しては、その解釈上従来種々の問題が提起されているが、要するにそれが杜甫春望の詩「感時花濺淚，悵別鳥驚心」をふまえての作であり、しかも別離の切々たる悲しみの心中を詠出したものであろうということは、すべての通説である。しかしかんに当時の長途の旅とはいえ、行程の到る処に自分を迎えてくれる門人・知人が予期されていた芭蕉が、出発に際していかほどの別離の切実感をもったかということは、**や**や疑われてならない。即ち俳諧がしばしば挨拶としての儀礼上の言葉として用いられ、なかんずく連句形式においては、それがいちじるしく社交性をおびたものであるからであり、それからしてもこの句は、門弟へのはなむけの言葉と見ることができるからである。こうした意味をもつものは、他にいくらでもその例を見出すことができる。尾張で門人杜国に逢い、別れる際の吟として、

白罌粟に羽もぐ蝶の形見かな

の句があるが、これに対しても従来は、別離に堪え得ないあまりに、羽をもぎとって形見にのこして行くという解釈が行われ、切々の情を訴えたものとされ、いちじるしく感傷性を与えられて、名吟のほまれ高いものであるが、この句に対しても叙上の意味においてやはり疑をさしはさまざるを得ないのである。

大阪園女亭に招請された際の句、

白菊の目に立てて見る塵もなし

に至っては、その場に臨んでこのように挨拶せざる得なかった彼の立場に思い及ぶならば、明らかに挨拶の句として受取るよりほかないであろう。近代俳句における、対象に肉迫するという態度とはいちじるしく異なるものがある。ただその表現の巧みさと芭蕉ほどの芸道精神の極においてのみ、かかる句作を可能としたであろうという、彼の力量に対しては、われわれはやはり敬服せざるを得ないのである。

これまで考察してきたように、わたくしは芭蕉の俳諧に対して、晩年における深化はもちろん考えられるとしても、あくまでもそのいわゆる俳諧性を認めようとするものである。

ここでまた貞徳の態度について言及しなければならないが、貞徳の句、
 行きつくす江南の春の光かな
 が、杜常の「行尽江南数十程」の翻案であり、
 花よりもだんごやありて帰る雁
 が、「古今集」の「春かすみたつをみすてて行くかりは花なき里にすみやならへる」のそれであるということからしても、やや極論ではあるが、芭蕉の態度には生涯払拭することのできなかつたものがあり、その態度にはいささかも相違が認められないものがあるのである。このような態度は一それは近世の俳諧全般を通じての傾向といえるが—また、さきにもふれたように、きびしい詩精神を基盤として—すべてがそうだということではないが—その上に築かれた象徴性によって形態づけられている近代の俳句との根本的な相違であるということができる。

彼はしかし、このような限界性の中にあつて、その深化の度を増大していったのであつた。彼はひとたびは談林の俳風の中に身をひそめたといわれているが、彼にとつてはとうてい内容的にまで談林的なものとはなり切ることができなかつた。それはまた芭蕉の宿命でもあつたが、また彼の体質的なものでもあつた。すなわちそれは、彼のはぐくみ育てられた環境につながる問題でもあつたといえよう。彼の武士的な、あるいは一面貴族的な精神が、とうてい談林的な卑俗さとは相容れなかつたのであつて、芭蕉が「宗因なくんば我々が俳諧今以て貞徳老人の誕をねぶるべし。宗因は此道の中興開山なり」と洩らしたという『去来抄』の言葉に対してすらも、再考する必要がある。すなわち芭蕉にとってみれば、貞門的な形式的俳諧からの個性解放を敢行することに成功した宗因の功績に対しての拍手であつて、そのほかの何物でもないと思われる。

従来、この言葉に対しては、もちろん貞徳に対する否定的な言葉として解釈せられてきたのであるが、要するにそれは、貞門的な式目による束縛に対する反撥と、表現の自由への憧憬、そうした心理的な動きが、彼をしてこのような言葉を吐かせたのであると考えるのである。そしてそれとともに想起されるのは、これもしばしば引用されるところの西鶴に対する評言、

世上のはいかいの文章を見るに、或は漢文を仮名に和らげ、或は和歌の文章に漢字を入れ、詞あしく賤しく言なし、或は人情をいふとても、今日のさわがしきくまぐまを探りもとめ、西鶴が浅ましく下れる姿あり。我徒の文章はたしかに作意をたてて、文字はたとひ漢字をかるとも、なだらかにいひつづけ、事は鄙語の上に及ぶとも、懐しくいひとるべし。(去来抄)

という言葉であるが、これについてみても、それは単に個人西鶴に対しての発言というよりも、談林的なるものへの反逆を意味するものであり、ことに末尾の「事は鄙語の上に及ぶとも、懐しくいひとるべし」という言葉が、貞門への復帰をば決意した芭蕉の心中を示すものにほかならないことが知られるであろう。そしてまた、「西鶴が浅ましく云々」の言葉は、俳諧に袂別して散文の世界に足をふみ入れた一人間を通して、そこに談林俳諧の末路をば発見して、それを嘲笑する彼の心中の率直なる表明ではないかと考えられる。すなわち、談林の俳人としてはなばなくデビューした西鶴が、談林俳諧をすてて浮世草子の世界に、その表現上の解決を求めたという、俳諧の未成熟さに対する嘲笑ではあるまいかとも考えるのである。更にまた、当時の浮世草子の世界は、芭蕉の精神にとっては、到底妥協することのできないものであったであろうし、当代の小説自体が被支配階級たる町人を対象とし、かれらの中にとけこんでいたものでもあったということから考えても、『貝おほひ』に見られるような、「衆道」の世界にひとたびは沈潜した彼ではあったとしても、そうしたものから完全に脱脚しきっている現在、芭蕉にとっては浮世草子そのものに対してすら、かなりの嫌悪の情を抱いていたであろうことが推察されるのである。そしてしかもこのような態度をとらざるを得なかった彼の資質的なものに対して、わたくしは彼の限界性を見出すことができるのである。芭蕉は談林、あるいは俳諧の通俗性を止揚するために漢詩を援用するところのあったことは、これまた周知のところであるが、こうした漢詩への志向も、また彼の資質からする必然の方法であったように思われる。そもそも漢詩の文学への援用は、古くは中古の定家にはじまり、近世の芭蕉や蕪村を経て、近代の漱石に至るわけであるが、それによって作品における通俗性の止揚に成功したのは芭蕉ただ一人であったといってよいかもしれない。しかもそれが、前述したように彼の文学の限界性の中においてなされたということはまことに特異とするたにるであろう。

さて、ここでわたくしは、何故に芭蕉が中世の古典を求めなければならなかったかということについて、更に一考を進めておきたい。

芭蕉が中世の古典を求めねばならなかったということと、その必然性については、さきにも述べたように、彼が貞門の俳人として出発したということに一応の根拠をわたくしは認め、更に、彼の体質的・資質的なものに第二の解決を求めたわけであるが、ここでいま一つその解決を求めようと思う。

芭蕉の作品を通じて見られる諸傾向については既に述べたところであるが、その現象の特異性の一つとして、わたくしは芭蕉が『万葉集』に対していかなる態度をとったかという点について考察してみたい。

近世における万葉の註釈ないし研究は、二条派の歌学の伝統をつぐ幽齋の門に学んだ人々、なかんずく木下長嘯子あるいは貞徳によってまず手をそめられたことは、従来文学史に説くところであるが、中でも貞徳は、その著『歌林樸樾』において記紀万葉以下の難語の註釈に従い、更に季吟は天和二年『拾穂抄』に着手したことが知られている。尤も季吟にとっては、『八代集』ないしは『源氏物語』、あるいは『枕草子』に対しての興味・関心の方が強かったことが推察されるが、季吟が『万葉集』の註釈に志したについては、貞徳の万葉集註釈未完の業を更に継承して、これを完成したものであると伝えられているし、それからしても、彼の興味の中心はやはり『八代集』あるいはその周辺にあったといえるであろうが、年代的に考察しても、芭蕉は『万葉集』に対する興味をば、おそらく季吟からは得ることはなかったであろうと考えられる。しかし既に下河辺長流による万葉註釈の事業も、万治年間には『僻案集』『万葉集名寄』が、寛文初年には『万葉集管見』が成立していたし、その他にもかなり盛に行われていたことが考えられ、それらの事情からしても、芭蕉の志向が万葉に存していたとすれば、当然彼によって取り上げられるべき可能性を充分に見出すことができるのであるが、芭蕉の作品について通読するとき、そこにはいわゆる万葉的なものの影がいかにかいかに見出すであろう。結論的にいえば、ここにも芭蕉の俳諧があくまでも俳諧であったということ、すなわちその俳諧性が万葉的なものとは相容れるものではなかったということ、またそれを必要としなかったということ、この二つにわたくしはその解決を見出すのである。

俳諧がそれ自体いちじるしく社交の具としての性格を附与せられたものであり、芭蕉は晩年に至るまで遂にそうした意味における俳諧性から脱出することが不可能であったということは、既に述べた通りであるが、素朴にして単純、技巧性の少い万葉の性格が、俳諧の要求するところとはいちじるしく相違していたことを認める必要があ

るであろう。万葉的なものは、俳諧への援用にはもはや必要のなかったことが芭蕉によって一更に古く、俳諧という新しいジャンルの成立のときにおいて一認められていたからにはほかならないであろう。芭蕉の作品の大多数のものが、もしも従来考えられているように、彼の心からの感動の所産であったとするならば、和歌の詠出の方法と俳諧のそれとが根本的に性格を異にするものではあるとしても、芭蕉によっては、何らかの形において受容され消化されるべきではなかったかということを考えなければならない。芭蕉の俳諧においては、もはや古今的なものすらも影をひそめようとしているのであり、そこにはいちじるしく技巧化し、遊戯化した新古今、あるいはこれは前後する時代の諸作、すなわち本歌取など、和歌における遊戯的な気分の横溢した爛熟頽廢期のもろもろの作品が追求されたということは、上述の意味からしても当然とすべきことであった。最後にわたたくしは、芭蕉の漢文的知識の導入のうちで、特に『莊子』との関係について論及しておこうと思う。

7

芭蕉の俳諧を考察して『莊子』からの翻案の非常に多いことは、従来もしばしば説かれていたところである。二、三引例を試みるならば、

永苦く偃鼠が咽をうるほせり（虚栗）

は、『莊子』逍遙遊篇の、

鷦鷯巢於深林不遇一枝，偃鼠飲河不過滿腹

がその出典として考えられてきたものであるが、管見によれば、これは例の司馬遷もその『独楽園記』の中にそのまま引用している言葉であるし、当時にあってはかなり人口に膾炙していた言葉のようでもあり、「永苦く」はまことに巧みなその俳諧化である。あるいはまた、

うぐひすを魂に眠るか嬌柳（武蔵曲）

の句は、莊子が夢に胡蝶となったという故事の俳諧化であることはいうまでもなく、芭蕉のこのような態度は、一面厳正であり、また佶屈な漢文とのとりあわせによる可笑味をねらったものであって、ここにも明らかに彼の文学の俳諧性が存するわけであり、それはまた、江戸時代小説の可笑味と無関係ではないと考えられるが、更に江戸時代に生きるすべての人々の好笑的態度にも連関性を持つ問題でもあるとも考えられる。また、

五月雨に鶴の足みぢかくなれり（東日記）

の句は、同じく『莊子』駢拇篇における、

芭蕉俳諧の限界性

長者不為有餘，短者不為不足，是故鳧脛雖短統之則憂，鶴脛雖長斷之則悲。
の援用であることは既に説かれているところであるが、これがいわゆる荘子の寓言論であり、これがまた既に貞門の諸俳人の間にも考察された問題であることを知るならば、芭蕉の説くところがあったという虚実の論にしても、貞門俳諧との連関性を無視することはできないであろうし、いいかえればそれは、芭蕉がその俳論においても貞門を脱し去ることができなかつた何よりの証左であり、ここにもわれわれはその限界性を見出すことができるのである。

以上わたくしは、芭蕉と貞門俳諧との関係、なかんずく季吟との関係を重視することによって、そこに芭蕉俳諧の限界性を求めたのであった。なおこの上に、芭蕉の俳論と貞門のそれとの比較検討をすることによって、一層両者の緊密性が明らかにされるのではないかと考えるのであるが、貞門に発した芭蕉が貞門的な世界に再び帰らざるを得なかつたという宿命的なものについては、およそ言を尽したであろうと思われる。わたくしがここに芭蕉俳諧の限界性を追求した所以は、芭蕉をしてその教祖的存在から解放して、真に近代的な犀利な眼による洞察と、鋭敏な感覚による批判精神とによって、その価値の再発見、ないしは再認識・再評価をなさんがための提唱であり、芭蕉に対する深い愛情を有するが故に、あえてこのような提言をなしたものであることをここに結語といたしておきたい。

附記：本論はかつて公表したものを骨子として、それに、その後得たところの考えにもとづく補正を試みたものであることをここに附記しておく。

(本学教授)